

【野菜】

ほほゑめばはつかに見ゆる片糸くぼトマトが赤き白がねの皿
しろき独活うど活ど厨どにさらしぬるときの水にゆらぎて春がきたらむ
青菫の卵とちとぞ簡明に一人の食は一枚の皿

佐佐木信綱『新月』 1912年
遠山光栄『褐色の実』 1956年
築地正子『菜切川』 1985年

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日
雪耳シユアル 銀耳インアルと呼ぶ名前ごと白木耳しろきらひをしゆりしゆりと食む

俵万智『サラダ記念日』 1987年
足立晶子『雪耳』 2001年

【果実】

茶まの間の暗き灯かげに水蜜桃ももはめば妻が浴衣ゆかたのまづしきをあはれ
早生はやなりの津軽のりんごかたく酸すっぱし噛かみて亡き吾娘あなごのごとしと思ふ
みかん一つに言葉ことばこんなにあふれおり かわ・たね・あまい・しる・いいにおい

新井洗『微明』 1916年
五島茂『気象』 1960年

豪快に三時間昼寝したるのち潰れ大桃食べて又寝る
ベリーAの重み一房食べてゐる誰も無口で同じ手つきで

俵万智『プーさんの鼻』 2005年
石川不二子『ゆきあひの空』 2008年
保坂耕人『保坂耕人全歌集』 2015年

【肉】

山鳥の脂肪あぶら濃き肉食はみたれば脆きまですぐに身のぬくみくる
毛にこの柔物もの毛のの荒物と呼びわけて鹿肉かのし猪肉あしのし食しひし祖おやたち
くれなゐの鹿のロースの冷えてゐる靈藏れいざうの庫くらにゆふべ近づく

真鍋美恵子『玻璃』 1958年
石川不二子『高谷』 2000年
伊藤一彦『石榴笑ふな』 2001年

【魚介】

ゆるぎなきものの如くに黒き目の澄む鯛を置き冬を置く皿
南より届けられたる明太子さわるな食べるな妻よ手を引け

築地正子『花綵列島』 1979年
晋樹隆彦『感傷賦』 1984年